

「小さいうち」 ★★★★★

2014（平成26）年2月11日鑑賞<109シネマズHAT神戸>

監督：山田洋次  
 脚本：山田洋次、平松恵美子  
 原作：中島京子『小さいうち』（文春文庫刊）  
 平井時子（雅樹の妻）／松たか子  
 布宮タキ（昭和）／黒木華  
 平井雅樹（玩具会社の重役、時子の夫）／片岡孝太郎  
 板倉正治（玩具会社のデザイン部門新入社員）／吉岡秀隆  
 荒井健史（タキの又甥）／妻夫木聡  
 布宮タキ（平成、健史の大伯母）／信賞千恵子  
 小中先生（小説家、タキの最初の奉公先）／橋爪功  
 小中夫人（時子の叔母、タキの最初の奉公先）／吉行和子  
 貞子（時子の姉）／室井滋  
 松岡睦子（時子の友人）／中嶋朋子  
 治療師（恭一の治療師）／林家正蔵  
 柳社長（雅樹の勤める玩具会社の社長）／ラサール石井  
 花輪の叔母／松金よね子  
 花輪和夫／笹野高史  
 カネ（タキの母親）／あき竹城  
 酒屋のおやじ／螢雪次朗  
 平井恭一（少年期）（時子と雅樹の息子）／市川福太郎  
 平井恭一（幼年期）／秋山聡  
 荒井軍治（健史の叔父）／小林稔侍  
 荒井康子（健史の姉）／夏川結衣  
 ユキ（健史の恋人）／木村文乃  
 平井恭一（晩年）／米倉育加年  
 2014年・日本映画・136分  
 配給／松竹

<82作目で、「家族の絆」から「家族の秘密」へ！>

山田洋次監督といえば、何といっても全48作の『男はつらいよ』シリーズだが、私が中・高校生の時に観た八千薫主演の、『馬鹿まるだし』（64年）、『いかげん馬鹿』（64年）、『馬鹿が戦車でやって来る』（64年）等の『馬鹿』シリーズを含めたこれまでの全81作のキーワードは「家族の絆」だ。山田監督は、はじめての時代劇3部作『たそがれ清兵衛』（02年）（『シネマルーム2』68頁参照）、『隠し剣 鬼の爪』（04年）（『シネマルーム6』188頁参照）、『武士の一分』（06年）（『シネマルーム14』318頁参照）を完成させた後も、『母べえ』（07年）（『シネマルーム18』236頁参照）、『おとうと』（09年）（『シネマルーム24』105頁参照）、『東京家族』（13年）（『シネマルーム30』147頁参照）で再び円熟した山田洋次色タップリの「家族の絆」を描いてきた。しかし、中島京子の原作『小さいうち』を読んで、「自分の手で映画化したい」と熱望した山田監督の本作のテーマは「家族の秘密」だ。

そう聞くと一瞬、本作はミステリー映画？と思ってしまいが、そうではなく、平井家に奉公する女中タキ（黒木華、信賞千恵子）が見た、奥様・平井時子（松たか子）にまつわる「小さな秘密」だ。松嶋菜々子主演のTVドラマ『家政婦のミタ』は大ブームをまきおこしたが、昭和モダンの時代には身近だったという「女中」と平成の時代の「家政婦」はその地位、立場が全然違う。したがって、本作を鑑賞するについてはまず、「あの時代」における「女中とは？」をしっかりと押さえる必要がある。しかして、昭和モダンの時代に女中タキがみた「家族の秘密」とは？

<昭和の東の間の平和の時代とは？昭和モダンとは？>

本作のストーリーの進行役になるのは、平成の時代の今もなお生きているタキ（信賞千恵子）に「自叙伝を書け」とたきつけ、タキの家に来るたびにその批評をしている又甥の荒井健史（妻夫木聡）。『母べえ』は昭和15年（1940年）以降の、軍国主義化が強まりすべての自由が抑圧・弾圧されていく時代を背景としていたが、本作は昭和6年（1931年）の満州事変から日中戦争が始まる昭和12年（1937年）頃までの昭和の「東の間の平和の時代」を背景としている。この時代はまた、大正12年（1923年）に起きた関東大震災後の復興に伴う郊外の住宅地開発と、日本の工業化に伴う中産階級（プチブル）の登場という時代であり、「昭和モダン」と称された時代でもあった。郊外に建てられた赤い屋根のモダンな家に住む玩具会社の重役である平井雅樹（片岡孝太郎）・時子夫妻と、雷深い弘前の田舎からそんな家に女中として奉公に出てきたタキとの人間関係は、そんな時代なればこそ成立したものだ。

現在、中国と韓国はさかんに安倍晋三首相の「歴史認識」に文句をつけているが、そもそも「先の大戦」をどうみるか？という大きなテーマになれば、国によってその認識が大きく異なるのは当然。そんな目で本作を観れば、タキの「あの時代は良かった」と述べる歴史認識と、健史の「戦時中は暗黒の時代だったんだろう」と述べる歴史認識が、大きく異なっているのはやむをえない。朝日新聞と産経新聞のそれが大きく異なるように、歴史認識を一致させるのは難しいが、本作が背景としているのは、『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）（『シネマルーム9』258頁参照）、『ALWAYS 続・三丁目の夕日』（07年）（『シネマルーム16』285頁参照）、『ALWAYS 三丁目の夕日'64』（12年）（『シネマルーム28』142頁参照）が描いた、「昭和の良き時代」（昭和30年代後半以降の戦後の高度経済成長期）ではなく、昭和6年頃から12年頃までの、このような両極端な歴史認識の相違がある「昭和の東の間の平和の時代」であることをしっかりと押さえておく必要がある。

<板倉の登場から、スリリング(?)な展開に>

『東京家族』では起承転結の「転」の部分は突然の母親の死亡だったが、本作のそれは新入社員・板倉正治（吉岡秀隆）の登場だ。平井家の応接間での柳社長（ラサール石井）を中心とした男たちの会話のテーマは日中戦争かビジネスだが、芸術を愛する青年・板倉だけはそんな話題に興味がなさそう。逆に、昔から赤い三角屋根のモダンなこの建物にどんな家族が住んでいるのだろうかという興味を持っていたと言う板倉は、平井の許可を得て建物の中を見学する中、恭一と仲良くなっただけでなく、時子とも映画や音楽の話で意気投合することに。板倉は時子の夫である雅樹の部下だから、まさかその2人が不倫関係（あの当時は不倫という言葉はなかったであろう）に陥ることはないと思いが、ある台風の夜、出張中の雅樹が自宅に帰れないと伝えに来た板倉と時子との様子を見てみると、何やら怪しげ・・・？さらに2人の仲を縮めたのは、雅樹が勤めた見合い話に板倉が乗ってこないため、その「説得役」とされた時子が、頻りに板倉の下宿を訪れるようになったためだ。しかして、最も身近に時子に接しているタキが驚いたのは、板倉の下宿から帰ってきた時子の帯の模様が出かける前とは逆になっていたこと。一体どこでこの帯が解かれたの？

本作を観ている限り、長年「家族の絆」をテーマとして描いてきた山田洋次監督は「家族の秘密」をテーマとしたミステリー色を盛り上げるのはあまり上手とは思えない。しかしそれでも、下宿のおじさんの囲碁友達である酒屋のおやじ（螢雪次朗）がタキに、あの当時存在していた恐ろしい法律、「姦通罪」のことをほめかすようになる・・・。

『ALWAYS 三丁目の夕日』では売れない作家・茶川竜之介を演じた吉岡秀隆が、本作でも丙種合格しかできない軟弱で目の悪い、あの時代には居場所を見つけるのに苦労したはずの若者を好演している。もっとも、当時甲種、乙種合格の若者はすべて軍隊にとられていたから、板倉が婿として引く手あまたになったのは、丙種にしか合格できなかったおかげ。そう考えれば丙種合格も悪くはないが、戦局が悪化する中、そんな板倉にも召集令状が・・・。アメリカの経済力をよく知っている雅樹がそんな事態の中で日本の将来をどう憂えたかは明らかだが、既にそれを大っぴらに言える時代ではなくなっていたことは、『母べえ』を見ても明らかだ。そんな時代状況の中、時子は板倉との別れをいかに・・・？そして、そこに生まれた「ある秘密」とは・・・？

<なぜこんな「策略」を？この「秘密」をいつまで？>

時子は平井家の奥様で、タキは平井家の女中だから、上下関係は明確。したがって、タキが時子の行動に意見を差し挟んだり、「お説教」をすることなどできないのは当然。ところが、板倉に召集令状が届いたと聞いた時子が、翌朝ただならぬ様子で出かけようとするのを見たタキは、「おやめ下さいまし」と毅然と言い放ったから立派。さらに、私が感心したのは、それに続けて「手紙を書いてくれ。それを私が板倉に届ける。奥様が板倉の下宿に行けば世間がどう見るかわからないが、板倉が平井家を訪れる分には何の問題もないのだから」としっかり提案したことだ。いくら女中からであっても、ここまで理詰めで攻められると、さすがの時子もグウの音が出なかつたらしい。ここでの2人の女優の「対決」が本作最大の見どころだから、このシーンは予告編でも使われていたが、松たか子のふてくされぶりは、いかにもサマになっている。

それはともかく、タキの提案に渋々従った時子は、手紙をタキに託し、その日の夕方まで板倉を待ち続けたが、ついに板倉は来なかったから、これにて時子と板倉の不倫(?)騒動はジ・エンド。平井家には以降何の波風も立つこともなかった。そして、「女中はぜいたく」という風潮の中、弘前に戻ったタキが聞いたところでは、あの赤い屋根のおうちも空襲で燃えてしまい、防空壕の中に夫婦の死体が発見されたらしい。したがって、タキの自叙伝は「そして坂の上の小さいうちの恋愛事件は幕を閉じました」で終わっていた。ところが、自叙伝を書き終えたタキは今、健史の目の前で一人号泣していた。それは、一体なぜ？

最近はお葬式のシーンから始まる映画が多い。『永遠の0』（13年）もそうだったが、それは本作も同じだ。タキの荷物を整理していた健史や健史の叔父・軍治（小林稔侍）、姉・康子（夏川結衣）が発見したのは、送り主として時子の名が書かれているものの、宛名のない一通の手紙。なぜタキが、時子のそんな手紙をずっと持っていたの？ひょっとして、この手紙はあの時の・・・？もしそうだとすると、タキはあの時一体ナニを考えてあんな策略を・・・？さあ、そんな山田洋次監督流のミステリー(?)を、あなたはいかに読み解く？

<赤い屋根の小さいうちに託した思いを、どう考える？>

小津安二郎監督の『東京物語』（53年）も、山田洋次監督の『東京家族』も「会話劇」だから、ストーリーはわかりやすいが、そのことが私には逆に少し「退屈感」を覚えさせていた。丁寧に描いているといえはそのとおりだが、このスピード感（の緩さ）はやはり山田洋次監督が80歳を超えたため・・・？それはともかく、本作前半は平井家の中にタキが女中としてうまく溶け込み、小児マヒにかかった一人息子・恭一の毎日のマッサージに励む中、雅樹や時子からの信頼を勝ち取っていく様子が丁寧に描かれていく。また、『母べえ』『東京家族』と同じように、山田洋次流の「時代認識」が登場人物たちのセリフによって丁寧に語られていく。そこまでの、「起承転結」の起承の部分だが、前述の「転」の部分が終わり結の部分に入ると、健史の恋人ユキ（木村文乃）と老年になった板倉が登場するのでそれに注目！

山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（70年、71年、73年）では、召集令状がきた吉永小百合扮する伍代家の四女・順子の恋人・標耕平（山本圭）が、「生きていた！」というストーリーが後半の大きなポイントになっていたが、本作ではあのひ弱な板倉が生き残っていたということが、ラストに向けてのミソとなる。

『永遠の0』でも特攻で死亡した祖父の生きざまと死にざまを孫がたどっていく旅がストーリー構成の軸になっていたが、それは本作も同じだ。本来なら、画やデザインで身を立っていたであろう板倉は、時子へのどんな思いを込めて赤い屋根の小さいうちの絵を描いていたのだろうか？また、ユキから教えられて健史がはじめて知った、アメリカのバージニア・リー・パートンが書いた絵本『小さいうち』の中に描かれた「小さいうち」とは、どんな共通点が・・・？昭和モダンの時代に建てられた赤い屋根の小さいうち（＝洋館）には、板倉と時子、タキだけではなく、さまざまな人間のさまざまな思いが託されていたはずだ。

『東京家族』と同じくテンポの緩さには少し違和感があるが、80歳を超えた山田洋次監督が丁寧に描いた、そんな昭和の東の間の平和の時代に起きた、ちょっとしたミステリー(?)をじっくりと楽しみたい。

<タイミングよくビッグニュースが！>

本作の評論を完成させた途端に飛び込んできたのが、黒木華が第64回ベルリン国際映画祭で銀熊賞（最優秀女優賞）に選ばれたとのビッグニュース。これは、ベルリン国際映画祭では、『彼女と彼』『にっぽん昆虫記』の左幸子（64年）、『サンダカン八番娼館望郷』の田中絹代（75年）、『キャタピラー』の寺島しのぶ（10年）、に続く4人目の快挙というからすごい。しかも、先の3人は女優として堂々の経歴を持っていたのに対し、黒木は女優業をスタートさせたばかりの23歳だ。2月17日付の朝刊で一斉に報じられた彼女の経歴を読むと、2007年に新設された京都造形芸術大学の映画学科2期生に在学中、劇作家・野田秀樹の舞台に抜擢されたのが女優への第1ステップだったらしい。また、2012年度下半期のNHKの連続テレビ小説『純と愛』では、ヒロインの狩野純役を演じた女優・夏菜が目立っていたが、その同僚役をこなしていたのが黒木だ。私好みの美人顔ではないが、山田洋次監督に言わせると、「日本一割烹着が似合う女性」らしい。

ちなみに、「STAP細胞」と呼ばれる「万能細胞」の発見で、突然世界最強の「リケジョ」として彗星のごとく登場した30歳の小保方晴子さんは、ミニスカートも似合っていたが、研究室での割烹着姿がなんとカッコよかった。そんな割烹着姿がよく似合う、2人の若い女性の登場を契機として、商売たくましいどこの企業が直ちに割烹着の大量生産、販売に踏み切れば、まだしばらく寒さが続きそんなこともあって、ひと儲けできるのでは・・・？